

Charles De Wolf (須田<sup>ろうあん</sup>狼庵)

言語学博士 文学翻訳者  
慶應義塾大学 名誉教授

アメリカ、ヨーロッパ、アジアで学び、  
1960年代末に韓国で教鞭をとり、その後来日  
現在、慶應義塾大学・早稲田大学の非常勤講師  
翻訳作品: *Tales of Days Gone By* (今昔物語 17 編)、  
*Mandarins* (芥川龍之介の作品集)、*Isle of Dreams*  
(日野啓三の『夢の島』)、*In Pursuit of Lavender*  
(絲山秋子の『逃亡くそたわけ』)など



大学時代に比較文学（西洋古典、独仏文学）を専攻。大学院では言語学が「科学的」であると考え、専門として学ぶ。これまで言語の歴史と発展、文法論などについて研究してきた。同時に、翻訳についても興味を持ち、翻訳のコースを担当、また翻訳についての記事を書くなど、意欲的に活動する。その後、言語学の論文の課題として、日本文学の古文に興味を持ち、『源氏物語』を原文で読み始める。それがきっかけとなり、古典文学に魅力を強く感じ、翻訳の題材としても考えるようになる。

\*\*\*\*\*

『今昔物語』は、光源氏の世界より、仏様や雲の上人から悪人や鬼まで、幅広い登場人物が現れます。また、作品の言語は原文としても分かりやすくありのままの文体です。実際の作業としては、あらすじを理解するより、洋書の童話に近い文学として翻訳することのほうが難しく、ここが重要なポイントとなるでしょう。

私が選択した30話の中で、「日本的」あるいは「東洋的」特徴をどのように英語で伝えるべきかという問題もあると思いますが、童話の普遍的な魅力もあり、英語圏の読者も『今昔物語』を楽しむことができるに違いありません。